令和３年度 鳥取看護大学・鳥取短期大学 地域研究・活動推進事業助成金報告

打吹玉川重要伝統的建造物群保存地区を中心とした倉吉市の観光活性化の考察

池口　友海（Tomoka IKEGUCHI）

鳥取短期大学生活学科住居・デザイン専攻

【背景と目的】

観光は地域の経済活動を行ううえで日本の重要な政策の柱と位置付けられている。倉吉には食物や温泉、文化など誇るべき観光資源が豊富にあり、白壁土蔵群は重要伝統的建造物群保存地区として国にその価値を認められている。しかし鳥取県の観光入込動態調査によると白壁土蔵群・赤瓦の年間観光入込は 2017 年の 652 千人から 2020 年の 440 千人へと３割も減少しており、2020 年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大の影響もあり減少幅が大きかったとしても、2019 年も 582 千人と 2017 年に比べ７万人近く減少している[1)]。一方、倉吉と同じく繊維産業を中心に発展を遂げた歴史があり、伝統的建造物群保存地区である倉敷市の美観地区は、2017 年の 3,648 千人から 2019 年の 3,283 千人と減少はしているものの[2)]、白壁土蔵群・赤瓦に比べ５倍以上の観光入込がある。

当初の計画は観光地として集客に成功している倉敷市美観地区を訪れ、繊維産業を題材とした観光の誘致や企画・活動を調査し、それを例として倉吉に導入可能なツーリズム等を考察する予定であった。しかし COVID-19 の感染拡大のために倉敷市との往来がかなわず満足な調査を行うことが困難であったため、また本来の商業活動を行っている状況ではなかったため、今回の計画を変更した。本研究は倉吉市の繊維産業の歴史が現在の観光活動にどのように関与しているか調査し、倉敷市との比較材料の収集を目的とする。

【内　容】

江戸時代中期以降、鳥取藩が国産奨励政策によって綿等の生産を奨励していたために[3)]、県中部は木綿の生産が多く木綿産地として知られていた。中でも久米郡は問屋制家内工業を取り入れたり、綿作・綿の買い付け、紡糸、織布を分業化したりと大きく綿業の発展を遂げた。さらに木綿織物の倉吉絣がうまれ、絣の生産額は明治 41 年で鳥取県の 50%近くを占めている[4)]。明治初期、鳥取県の士族授産事業や殖産興業の一環で養蚕業が奨励されたことによって倉吉の養蚕業が始まり、明治中頃には製糸会社の設立が多くあった[5)]。

1.　観光資源の可能性

新編倉吉市史に掲載されている倉吉の主要な繊維産業の会社・工場 14 点のうち、８点の所在地を文献や倉吉市教育委員会文化財課によって特定し、現在その形跡が残っているか調べた。詳細は「倉吉市史」、「新編倉吉市史」、中国電力エネルギア地域経済レポートの「鳥取県を中心とした産業発展の歴史」明治・大正編（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）および（昭和編Ⅰ）を参考にまとめたものである。

①　山陰製糸会社

詳細：明治 23 年に福吉町で操業を開始し、昭和８年に郡是製糸株式会社に買収される。フランス製の機械を参考に蒸気機械を開発したり、長期保存後も糸質が低下しない独自の貯繭法を開発したり、明治 34 年から会社内に蚕種部を設け、「山陰又昔」という新品

種を作ったりするなど、研究開発に努めた。郡是製糸に買収される頃、敷地面積は 18,807 ㎡、建築面積 11,392 ㎡、資本金 100 万円、釜数 405 釜の規模で繭 637,500kg を購入し、生糸 72,000kg を生産した。従業員は 550 名。

現在：工場は取り壊され空地になっている。敷地の一部には取り壊し前からディスカウントストア、ドラッグストアが建てられている。県内外から高い評価を受けた倉吉を代表する製糸会社の面影は無くなってしまった。（写真１）

② 斎木製糸会社

詳細：明治 13 年に蚕を飼育し始めた斎木善三郎が、明治 16 年に座繰製糸を試み、明治 19 年に堺町２丁目に工場を建設した。国内最大の市場である横浜での取引に成功したことにより、工場の機械化を進め明治 41 年には 100 釜まで規模を拡大した。同工場で製造された「お多福印」の生糸は高品質で海外輸出品として評価された。昭和の初めの資本金は 18 万円、釜数 138 釜の規模で繭 262,500kg 購入し、生糸を 25,800kg 生産した。従業員は 206 名。昭和 14 年には操業停止し、昭和 15 年に建物を紵麻会社に売却した。

現在：駐車場や福祉施設があり、店舗の空き家が目立つ。製糸会社だった頃の敷地範囲もわからなくなっている。（写真２）

③ 三島製紙会社

詳細：明治 23 年に河原町で開業。明治 23 年末時点で資本金 8,316 円、従業員は 62 名で、生糸 438.75kg を生産し、その額は 4,108 円。鳥取県で最も早く動力源として蒸気と水車を併用した会社であった。１年間に繭 19,500kg を使用して生糸 1,755kg を生産している。

現在：駐車場や民家が立ち並んでいる。中には寝具専門店の工場の看板が掲げられている建物があり、操業しているかは定かでない。（写真３）

④ 小川製糸会社

詳細：明治 18 年に河原町に座繰 25 釜の倉吉製糸会社が設立され、明治 20 年には洋式機械を導入して 50 釜に規模を拡大した。明治 26 年に創業者である小川貞四郎の単独経営に移行したことから「小川製糸会社」に改称。倉吉製糸会社の頃ではあるが、「明治 24 年鳥取県統計書」によると資本金は 1,800 円、従業員は８名で、１年間に 543.75kg の生糸を生産し、その額は 5,445 円であった。小川製糸会社の頃である明治 31 年の１年間に生糸 1,732.5kg を生産した。従業員は 56 名。

現在：製糸に使用されたとみられる建物は残っている。側を流れる鉢屋川には当時のものかは不明だが、水車もあった。建物に立ち入ることは出来ないが、すぐ側にある庭園は小川貞四郎の後代が庭師に築かせたもので“小川氏庭園「環翠園」”として一般に向けて公開している。周辺の景観はとても良く、製糸業に基づくものではないが、既に観光利用されているようである。（写真４）

⑤ 片倉製糸上井分工場

詳細：長野県諏訪部の片倉兼太郎を中心とした片倉一族の製糸会社で全国や朝鮮に製糸工場を設立していた。上井分工場は大正６年に創業開始。釜数 620 釜、従業員約 1,000 名と、地元の製糸工場に比べて大規模であった。昭和 19 年には株式会社神戸製鋼所に買収され神鋼兵器工業株式会社になっている。

現在：名称は変わったものの、神鋼機器工業株式会社として今も操業している。倉吉駅の北西に位置し、国道 179 号線のバイパス道路から見下ろす敷地の広さからは、大規模な製糸工場だったことを今も見てとれる。（写真５）

⑥ 同栄製糸

詳細：繭が大資本の製糸会社の付け値で売られるようになり、その状況を打開するために養蚕家が共同出資し組織した組合製糸会社。昭和３年頃から昭和 17 年まで存続してい

た。昭和８年頃同じく組合製糸である伯西社、蚕業社、弓ヶ浜製糸で鳥取県産業組合製糸組合を設立し、組合製糸の全盛期を迎えた。

現在：倉吉市立河北中学校の一部や住宅に利用されていて、区画もわからなくなっている。（写真６）

⑦　山陰紡績会社

詳細：福吉町にて資本金 200 万円で大正９年頃に創業した。翌年には従業員を 500 名募集するなど工場維持に努めた。しかし大正 13 年経営不振に陥り、福島紡績株式会社が援助する形で、大正紡績株式会社に改称し資本金 50 万円で事業を再開した。福島紡績株式会社の経営転換から昭和３年、大正紡績株式会社は買収され福島紡績株式会社倉吉工場となった。昭和９年の工員数は 422 名、昭和 14 年には 464 名と規模を拡大し、同年の生産額は 325 万円で倉吉町の工場生産額の 66％を占めていた。昭和 17 年に、戦時統制により敷島紡績株式会社と合併、軍の指示で軍事工場神鋼兵器工業株式会社に買収された。

⑧　興和紡績株式会社倉吉工場

詳細：神鋼兵器工業株式会社の所有となった⑦は、終戦後しばらく放置されていたところを昭和 26 年に興和紡績株式会社が譲受し、敷地を 164,396 ㎡と５倍に拡張した。当初の従業員は 544 名。目標である綿紡機 100,000 錘に達しなかった代償として福祉会館建設費の一部を寄付、工場用地の一部や市営ラグビー場を市に譲渡した。

現在：広大な土地は倉吉パークスクエアとなり、公共施設として県民に向けて文化の拡大と振興を行っている。東にあるラグビー場は令和６年度の開館に向けて鳥取県立美術館を建設している。上灘中央公園は工場用地の一部だったようだ。（写真７）

写真１．①山陰製糸会社跡地の現在

写真２．②斎木製糸会社跡地の現在

写真３．③三島製糸会社跡地の現在

写真４．④小川製糸会社跡地の現在

写真５．⑤片倉製糸会社上井分工場跡地の現在

写真６．⑥同栄製糸跡地の現在

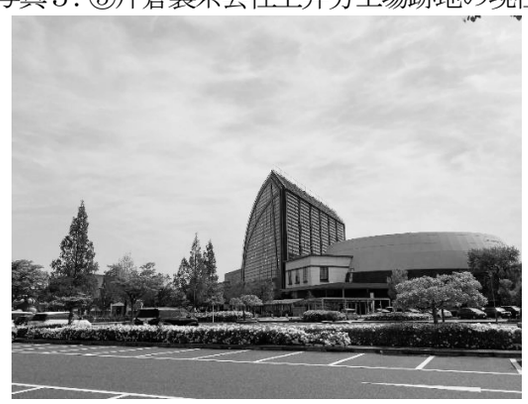

写真７．⑦⑧山陰紡績会社・興和紡績株式会社
倉吉工場跡地の現在

2.　観光活用の実態

倉吉白壁土蔵群観光案内所に陳列されている観光資料のうち、倉吉の繊維産業について触れている資料は９点あった（表１）。全ての資料が綿業と接点があることに対し、養蚕・製糸業に関するものは２点しかない。綿業も絣を題材にしており、高尚な伝統工芸として名を馳せた倉吉絣は市民にとって誇れる観光資材なのだろう。コンテンツとしても繊維産業にまつわるものは展示販売、機織り実演・体験、資料の見学、着物着用体験、ツアーガイドと趣向を凝らしている。

表１．観光案内所に陳列されていた観光資料の概略と繊維産業との接点

資料	概略	繊維産業との接点	制作
小川氏庭園 環翠園	国登録記念物・鳥取県指定文化財名勝である庭園「環翠園」への入園を案内している	「小川家の歴史」欄に、三代の富三郎が綿商売で財を成し、四代の貞四郎が明治26年に小川製糸場を設けたとの記述がある	一般社団法人小川記念館財団
倉吉絣	倉吉絣で制作された着尺、のれん、コースター等の作品紹介及び、「倉吉絣展示即売処」への誘致	伝統工芸である“倉吉絣”の文字を表紙に記し、絣作品の写真を掲載している 一見して倉吉絣に関する資料だとわかるような、絣を彷彿とさせる文様や色合いでデザインされている	倉吉絣保存会
倉吉 白壁土蔵群の楽しみ方	白壁土蔵群でできる体験の紹介	倉吉絣の着物着用体験、機織り機を使用する〝倉吉絣コースター〟製作体験が紹介されている	一般社団法人倉吉観光MICE協会
倉吉博物館 倉吉歴史民俗資料館	倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館への入館を案内するもので、主に美術部門・考古部門・民族部門の展示を紹介している	民族部門の主な展示資料として、倉吉絣の起源、歴史、特徴や図が記載されている	倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館
倉吉文化財さんぽ	倉吉市にある国・県・市の指定文化財計116を、地区等に分類し纏めている	県指定文化財である「小川家住宅」「小川氏庭園」の主、小川家の説明に、明治18年に小川貞四郎が製糸会社を設立したと記述がある 同じく県指定文化財の「絣（技術保持者　福井貞子）」「鳥取県の絣関係資料」が掲載されている	倉吉市教育委員会事務局　文化財課
白壁の街 倉吉打吹玉川伝統的建造物群保存地区街歩きガイド	倉吉打吹玉川伝建地区周辺の地図に、飲食、買い物、体験ができる商業施設の位置が示してある 白壁土蔵や町家の特徴についても簡単に解説している	主に倉吉絣の工芸品を展示販売している「倉吉ふるさと工芸館」が紹介されている	一般社団法人倉吉観光MICE協会
鳥取県倉吉市 倉吉絣deまち歩き	倉吉絣の着物・履物・巾着バッグのレンタルや着付け、ヘアアレンジのサービスや「ほどき紙」体験を案内している	倉吉絣の着物を着用した女性の写真を大きく使用し、企画内容も倉吉絣を主としている	一般社団法人倉吉観光MICE協会
鳥取県倉吉市 白壁土蔵群観光ガイド	白壁土蔵群を5つのコース別にガイドするサービスの案内	稀にガイドが倉吉絣の着物を着用する事、例として挙げられているコースに、倉吉絣を展示販売する「倉吉絣ふるさと工芸館」が組まれている事の記載がある	一般社団法人倉吉観光MICE協会
なつかしき頃を思い出す 倉吉	「白壁土蔵群とその周辺」「歴史探訪」「関金温泉」「体験」「イベント情報」「周辺観光」「宿泊施設」等を見出しにして、多種多様な倉吉の観光資源やアクセス情報、観光マップをまとめている	機織り機の展示がある「やきすぎ彫刻館・手織工房くらよし絣」、倉吉絣の展示販売や実演が見られる「倉吉ふるさと工芸館」、倉吉絣の着物着用体験が可能な「倉吉絣で街歩き／浴衣で街歩き」、土産として「倉吉絣」が紹介されている	倉吉市役所　商工観光課

【総　括】

過去に実際に稼働していた会社や工場の跡地のほとんどは、現在、観光には利用されていない。既に商業施設や工場として使用されていて、特に住宅地でどこからどこまでが跡地なのか分からなくなっている場所もあり、利用できる可能性は空き地や空き家に見出せそうである。現在の山陰製糸会社跡地、神鋼機器株式会社、倉吉パークスクエアの広大な敷地からは、かつて工場として操業していた頃の規模を伺うことができ、姿は変わっているものの繊維製造会社だったと聞けば、倉吉の経済発展に貢献した工場であることは想像に難くない。しかし繊維製品は鳥取県内外から高く評価され、多くの雇用機会の創出と生産額を誇る倉吉に於いて、主要な繊維産業の会社・工場の廃業等により繊維のまちであった印象は薄らいでいる。

一方で伝統工芸品の倉吉絣は観光資源としてよく利用されている。しかし街並みからは倉吉絣の主張があまり感じられず、観光資料を見たり店舗に入ったりして初めて絣のまちだったと知る観光客が多いだろう。絣を織りあげる機工場は打吹玉川伝統的建造物群保存地区の周辺に多く存在したため、そこで絣を題材にした観光事業を活発に行うことになんら違和感はない[3)]。

残されている資源には限りがあるが、倉吉には産業観光として成り立つだけの十分な繊維の歴史がある。筆者は“地域とともに歩む大学”に居ながら、県中部の人々が繊維産業において情熱を燃やし倉吉の文化と経済の発展に寄与した事実を知らなかった。観光立国推進基本法では、施策の基本理念として、「地域の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の持続可能な発展を通じて国内外からの観光旅行を促進することが（中略）重要である」とされている[6)]。まずはこの歴史を市民が認知し誇りに感じることが、繊維産業を題材にした観光活性化の第一歩なのかもしれない。

＜謝辞＞

本研究の遂行にあたり、筆者の恩師であり、成徳地区玉川を美しくする会会長の倉恒俊一氏より、打吹玉川伝建地区の調査について有意義な助言を賜りました。ここに深謝の意を表します。また博物館資料を基に所在地の特定を行ってくださいました、倉吉市教育委員会文化財課文化財保護係主任学芸員の箕田拓郎氏に、厚く御礼申し上げます。

＜引用・参考文献＞

１）鳥取県ホームページ「主要観光施設入込客数」
https://www.pref.tottori.lg.jp/70595.htm（2021 年３月９日閲覧）
２）倉敷市ホームページ「～令和２年～倉敷市観光統計書」
https://www.city.kurashiki.okayama.jp/secure/143387/toukeisyoR02.pdf（2021 年 11 月 16 日閲覧）
３）中国電力株式会社（2014）鳥取県を中心とした産業発展の歴史（明治・大正編Ⅰ）エネルギア地域経済レポート
４）倉吉市史編纂委員会（1973）「倉吉市史」河北印刷株式会社
５）新編倉吉市史編集委員会編（1996）「新編倉吉市史 第三巻 近・現代編」倉吉市
６）国土交通省観光庁ホームページ「観光立国推進基本法」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonhou.html（2022 月４月 28 日閲覧）